



4D Internet Commands バージョン 2003 へようこそ。このドキュメントでは、本バージョンの 4D Internet Commands に導入された新機能について説明します。

TCP コマンドの接続リファレンス

4D Internet Commands 2003 を使用すると、POP3、IMAP、または FTP 接続のリファレンスをローレベル TCP コマンドへ直接渡したり、受け取ることができます。

実際には、プロトコルは絶えず進歩しているため、新しいコマンドの作成が必要になります。また、他方では、ソフトウェアパッケージのなかには RFC に関して独自の解釈を行うものがあり、標準化された解釈の実装が使いものにならないという事態が生じています。今後、ローレベル TCP コマンドの使用に際して（既存の関数を使用する代わりに、または存在しない関数を補うために）開発者はそれぞれで必要となるハイレベル関数を作成することができます。

この新しい機能により、開発者はプロトコルの使用に必要となるコマンドをすべて書き換えなくても、独自のハイレベルコマンドを作成できるため、互換性や開発能力が著しく向上します。

▼ この例題では、**IMAP_Capability** コマンドが **TCP_IP** コマンドを使用して開発された同等の関数で置き換えられています。

- ・ **IMAP_Capability** コマンドを使用した最初のメソッドを次に示します。

```
$ErrorNum:=IMAP_Login(vHost;vUserName;vUserPassword;vimap_ID)
If($ErrorNum=0)
C_TEXT(vCapability)
$ErrorNum:=IMAP_Capability(vimap_ID;vCapability)
... ` 引数 vimap_ID を使用した IMAP コマンド
End if
$ErrorNum:=IMAP_Logout(vimap_ID)
```

- ・ 前述のメソッドは次のメソッドで置き換えることができます。

```

$ErrorNum:=IMAP_Login(vHost;vUserName;vUserPassword;vImap_ID)
If($ErrorNum=0)
C_TEXT(vCapability)
` 引数 vImap_ID の値を使用した TCP メソッド
$ErrorNum:=My_IMAP_Capability(vImap_ID)
    ... ` 引数 vImap_ID を使用した IMAP コマンド
End if
$ErrorNum:=IMAP_Logout(vImap_ID)

```

- ・ 関数 **My_IMAP_Capability** のコードは次の通りです。

```

C_LONGINT($1;$vErrorNum;$0)
C_TEXT($vSentText;$vReceivedText;vCapability)
C_TEXT($2)
$vImap_Id:=$1
$vCmd_Id:="A001" ` このコマンドID は一意でなくてはならない (RFC 2060 参照)
$MyvtRequestCmd:="CAPABILITY"
$vSentText:=$vCmd_Id+" "+$MyvtRequestCmd+Character(13)+
Character(10)
    $vReceivedText:=""
    $vErrorNum:=TCP_Send($vImap_Id;$vSentText)
If($vErrorNum=0)
    $vErrorNum:=TCP_Receive($vImap_Id;$vReceivedText)
Case of
    ¥ ($vErrorNum#0) ` 受信エラー
        vCapability:=""
    ¥ (Position($vCmd_Id+" OK";$vReceivedText)#0)
        ` コマンドが正常に実行された
        vCapability:=$vReceivedText
        ` この例題では、受け取った文字列の処理は行わない
    ¥ (Position($vCmd_Id+" BAD";$vReceivedText)#0)
        ` コマンドの実行が失敗した (シンタックスエラーまたは未知のコマンド)
        vCapability:=""
        $vErrorNum:=10096
End case
End if
$0:=$vErrorNum

```

SMTP_Auth コマンドの新しい引数

SMTP_Auth(smtp_ID;ユーザ名;パスワード{; 認証モード}) → 整数

引数	タイプ	説明
smtp_ID	倍長整数	→ メッセージのリファレンス
ユーザ名	文字列	→ 「SMTP Auth」 認証に使用するユーザ名
パスワード	文字列	→ 「SMTP Auth」 認証に使用するパスワード
認証モード	整数	→ 使用する認証モード 0または省略 = サーバ側で決定されたモード 1= PLAIN、2= LOGIN、3= CRAM-MD5
戻り値	整数	← エラーコード

SMTP_Auth コマンドは、新しい任意の引数<認証モード>を受け入れ、使用する認証モードを“強制的に”指定することができます。

引数<認証モード>には、0、1、2、3のいずれかの値を渡すことができます。

- 0（ゼロ）を渡した場合、SMTP_Auth コマンドで使用する認証モードは、そのサーバでサポートされる最も安全性の高いモードになります（CRAM-MD5、LOGIN、またはPLAIN）。
- 1を渡した場合、使用される認証メソッドはPLAINになります。
- 2を渡した場合、使用される認証メソッドはLOGINになります。
- 3を渡した場合、使用される認証メソッドはCRAM-MD5になります。

<認証モード>を省略すると、デフォルトとして値0が使用されます。

この引数により要求された認証メソッドがSMTPサーバではサポートされない場合、エラーが返されます。

